

令和7年3月7日

令和6年度練馬区立光が丘さくら幼稚園学校評価報告書

練馬区立光が丘さくら幼稚園

園長 檀原 雅恵

1 自己評価結果

(1)概要

今年度は幼児の在籍数が減り、2 学年共に2学級の合同保育を主体にした教育活動が行われた。また、2歳児1年保育が保育課・保育計画調整課の事業で同じ施設内で一年間行われ、様々な連携をし、保育の幅を広げることにもつながった。

保護者への「幼稚園の教育活動に関するアンケート」はほぼ全員の方から回答を得る回収となり、保護者の意見を集約し考察することができた。このことは、園の教育について保護者の関心が高いことが読み取れ、共に子どもたちを育てる思いを共有していると感じることとなった。

また、どの項目についてもA、Bの肯定的評価が高く、保護者の園への信頼・関心の高さと園側の努力が伝わった結果と受け止めている。幼稚園に対する様々な温かな自由記述から、支援していただいていることが読み取ることができ、今後も熱いエールを頑張り、幼稚園経営に取り組んでいきたい。

【成果】

○本園の特色ある教育活動として今年度は「多様な人と関わる中で共に育つ教育」を推進した。「多様な人と関わる中で共に育つ教育」については95.5%がA評価という最も高い数値となった。近隣の保育園児、未就園児、小中学生、高校生、高齢者等と計画的に交流、みんなともだちの日や親子で遊ぼうデー、どんどこまつりでの地域の方や児童館による様々な体験、日々の保育の中で警察官や消防署、防災課や清掃事務所などとの連携による様々な体験活動、それらの教育活動で地域とのつながりにより教育内容の充実を図り、多様性を尊重し、共生社会を目指していることが評価につながっていると考える。近隣の公園、区民体育館プール、地域の農家で芋ほり等の地域の施設を活用して遊びや生活をつなげ、生かされていることも評価の現れと考える。また、日々の教育活動では豊かな遊びにつながる環境を構成し、多様な人との関わりの中で、主体性を始め、幼児期の資質、能力の育成、その中の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として年齢やその時期に応じた育ちを読み取りながら分析し幼児理解を深め、教師の援助について協議し実践につなげてきた。担任からは降園時の保護者へのホワイトボードや口頭での連絡、学年保護者会や個人面談での伝え方を工夫し、管理職は園だより、行事のある日に写真でのお知らせ、廊下の写真掲示、保護者にわかるように選定した写真販売、さくらトーク(園長と保護者の懇談会)、通信サービス(Sigfy)での配信でペーパーレスにより携帯電話で内容が見えること等で「見える化」「分かる化」を実践してきたことが保護者の理解を得られたと思われる。保護者から非認知能力を育んでいると感じるとの言葉を大勢からいただいたことも、保護者と共有していることを大いに感じる。

○学校地域連携推進事業の取り組みが地域連携や多様な人との関わりに効果をもたらすことができた。

○近隣小学校長や保育所園長、高等学校長等との顔の見える関係の中で連携をさらに進めて、園の実態も理解していただいた。小学校長の講話や光が丘第11保育園看護師による保健だより、及び幼児への話なども地域との連携や多様な人と関わることにつながった。

【課題】

○教育目標の評価ではC評価があり、B評価もあったが、A評価は増加していることに目を向け、保護者に分かりやすく日々の保育の中でも育っていることが実感できるように伝えていきたい。また、幼児一人一人がそれぞれの個性の中で3つの姿が育っていくために教員も資質向上していきたい。

○練馬区で導入された通信サービス(Sigfy)を活用してペーパーレス、データ保存が携帯電話にできることなど便利になったと園側も思っているが、重要度について配信される時点で分かりにくいこと、配信の時間帯などにも工夫が必要と思われる。

【改善策】

○教育目標は本園の基本的な育てたい姿である。人との関わり方については教員がモデルになることが不可欠になってきている。教員は担任だけでなく、介助員、主事、事務、預かり保育補佐員、管理職と様々な業種と一緒に幼児に関わっています。それぞれが幼児にとってのよきモデルになるよう関わっていく。

○教員の質の向上、保護者との連携に努める。保護者が入園あるいは進級当初の幼児の姿と今現在の姿を比べた時に成長を感じていることが見えるように、一人一人の幼児、学年全体での幼児の成長の具体的な姿を幼稚園指導要領、園の教育目標、練馬区子育て大綱など幼児教育の根拠になるものとのつながりを含めて分かりやすく伝える努力をしていく。

○保護者に幼児の姿を通して教育内容の意味を理解していただき共有できるよう、今までよりさらに、さくらトークへの参加者増大を目標にし、アピールしていきたい。かわら版やHPの活用、区立幼稚園のXの発信などで教育の意義や関わっている団体なども丁寧に伝えていく。また、地域の方々へ伝える工夫も考えていきたい。

○子育て支援を念頭に、育児を保護者が一人で悩まないよう、保護者同士、教員も含めたコミュニティの場作りを考えていきたい。サークル活動に気軽に参加できる体制、未就園児親子の居場所とコミュニティや園長と気軽に相談できる体制も構築しながら、様々な関係機関ともつながりを持ち、孤立しない保護者であるように支えを考えていく。

○近隣小学校長や保育所園長、高等学校長、私立幼稚園、認可保育所長等との顔の見える関係の中で連携し、幼保小の架け橋プログラムの実施を進めていく。

○通信サービス(Sigfy)の配信では重要度の印や配信時間を考えて、保護者に有効な通信となるようにしていく。

(2)根拠となる資料

1. 近隣の保育園、未就園児、小中学生、高校生、高齢者等と計画的に交流を行い、直接交流やオンラインを活用した交流等、双方の工夫をして、様々な年代の人たちとの関わりを通して、思いやりや思いやりを育み、地域社会に関わった幼稚園教育活動の充実を感じる。

2. 「交流大好き」を「自分が大好き」を表現する保育を展開し、自分自身や交流を尊重する気持ちや態度を養う経験をしています。自分も交流もそれぞれの様々な可能性を感じた関わりでは、教師がモデルとなり認め合い受け止め合える集団を形成し、大切な仲間であることを認識できるようにし、人権教育の土壌を育てることを感じる。

3. 「自分で考えて行動する子ども」も幼児：食事、着脱、排泄などの生活習慣を自分でやろうとしている姿が見られます。幼児：様々な出来事に自分で考えて取り組んだり、集団生活でのルールを覚悟したりする姿が見られます。

4. 「思いやりのある子供」も幼児：先生や友達と過ごすことに楽しんでいると感じます。幼児：交流の経験などに気が付いたり、年下の相手と交流したりして楽しんでいると感じます。

5. 「明るく元気な子供」も幼児：仲の伸びと楽しんでいます。幼児：やりたいことを見つけて、自分の思いを表現し、遊びを楽しんでいます。

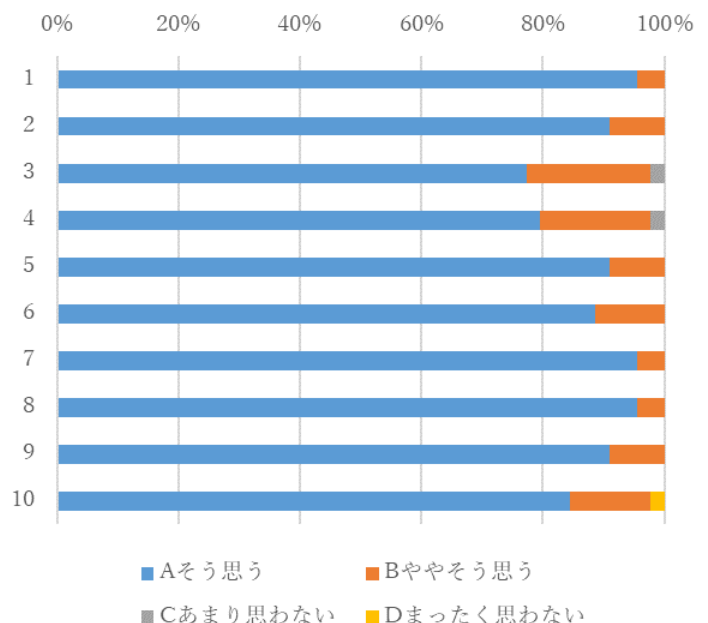
6. 保育参観、参加を通して保育活動を知り、懇談会・面談などでは担任と共に子どもの成長を感じ、相談ができる。

7. 園だよりや保護者会、さくらトークによる説明などにより、非認知能力の必要性や幼稚園の教育方針、育ちたい資質能力などの幼稚園教育の大事にしていることがよく分かる。

8. Sigfyの活用で手紙や連絡を交換し、欠席連絡が入られるなど、便利になった。

9. 近隣の畑・公園・体育館・プールなど地域の施設を活用し、幼児の教育活動を充実させていると感じる。

10. 近隣の児童館、図書館、子育て支援センター、障害者支援団体などによる親会もあそび、とんとこまつり、みんな交流の日、親子で遊ぼうデーなど様々な活動での交流や公園に幼児は刺激を受け、教育活動が広がったと思う。



2 学校関係者評価

(1) 総括

【成果】

関係者評価委員会より

- ・ミックスランドでは、子どもたちがとても素直で受け入れ合っていることがよく分かった。子どもたち自身が「自分たちで考える」「自分たちで決めていく」過程を知ることができた。この経験は小学校に入学した際に大いに活かされるように思う。また、支援を必要とするこどもにとって大切な1つには、その支援を必要とする子どもも仲間だと思ふ子どもたちの存在である。友だちが自分の思い通りにならなかったり、何か違ったことをしてしまったりしても相手のことを否定する子がいなかった。それだけ園児が多様性を受け入れていることを感じ、そんな空間、居場所はステキだと感じた。
- ・ミックスランドで子供同士の話し合いを30分もしたという話を聞いて、大人になると、なかなか自分の意見を言えず、周りにあわせて自分の思いをのみこんでしまうことが多いけど、子どものうちに話し合ってよりよい方に解決策をみつけていく、意見は違っても、納得いくまで話し合ってもいいんだということを知る機会がもてることはすばらしい。毎日毎日、その日のふりかえりをして、次の日につなげていく事は大変なことだけれど、その成果がでているから、みんな伸び伸びと楽しくすごせている。
- ・修了生が、今でも主体的な遊びの工夫がすごいことを家庭でも感じる。ずっと頑張れるのは自己肯定感のおかげと思う。
- ・研究会が魅力的、教育深めることができているのを感じ、継続していることがすごいと思う。
- ・幼稚園とは初めての関わりとなるが、運営面がしっかりとしていて驚いた。幼児一人一人の成長を見取り、子どもを丁寧に見ているのを感じる。
- ・先生の関わりがすごく素敵で、一人一人に寄り添っている。トラブルも対応して一人一人のことを大事にしていることがわかる。納得するように導いてくださっている学びの多い保育を感じる。続けて行ってほしい。
- ・保育園、私立幼稚園も来ての研究会有効だと感じる。
- ・同世代だけでは人との関わりが弱い。地域への活動を広げていることで、世の中にはいろいろな人がいることを知り、多様性を知ることができる。

【課題及び改善策】

- ・小学校の先生が公立幼稚園の保育を是非に見に来てほしい
- ・高齢者の施設である。団塊の世代が増えている。老夫婦だけの世帯が多い。多世代の交流が少なくなっている。しかも、閉鎖していく方向に感じる。意図的に多世代交流をしていく施設にしていきたい。どう支えるかが問題になっている。幼稚園との交流は何年後かを見据えて進めていきたい。
- ・小学校1年生の50%以上が学童入室で、ねりっこクラブは90人が標準。20人の学級から90人の大所帯へのギャップがある。幼児のうちから他保育所と連携し大所帯に慣れる環境もあるとよい。保育園との交流の機会をもっと増やしてもよいのでは。集まれる限りの人数でいる機会の場がつかれるとよい。様々な人の考えが伺える。大人数の体験ができる。
- ・9月最初に放課後の居場所説明会を毎年しているが今年のはるかに多い人が集まった。就学前にするのが大事なので連携していきたい。
- ・年に1度の同窓会しかないが子ども同士の関わりがあれば小学校先輩と会う機会があると両者に互恵性があるのではないかな。修了生の心のケアにもつながる。幼稚園生にはモデルとしてよい影響がある。計画していけないか？
- ・何を思っているのか保護者が教師の思いを知ること目標を高められることがあるので、その発信をもっとしてほしい。
- ・さくらトークの参加率が上がっているが、さらに多くの人に聞いてほしい。働く保護者のつながりが薄い。保護者の交流できたらいいと思う。
- ・幼稚園の保護者同士の親睦会を年1回やっていた。小学校も親睦会することで名前と顔が一致する。

保護者会はしゃべるきっかけづくりをお願いしたい。小学校に行くと連絡網もないので保護者同士つながりなく子ども同士遊ぶ約束していても親に直接聞けない。保護者同士のつながりがもてないので幼児期はできるだけつながってほしい。

・児童館、高齢者施設との幼児・保護者にとっても有益な連携を考える。

3 評価結果の公表等

- ・事前に資料を配布し、2月21、27日保護者会にて園長より説明。
- ・本園ホームページに3月中に概要を掲載。

4 次年度の学校改善へ向けた園長の見解

(1)中期経営目標の実現に向けて

- ① 幼児期の豊かな体験を保障し、「主体的・対話的で深い学び」につなげる幼児教育の実践
- ② 課題の発見と解決に向けて主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の育成
- ③ 区立・地域の幼稚園としての子育ての支援を推進

①「幼児期の豊かな体験を保障し、「主体的・対話的で深い学び」につなげる幼児教育の実践」

幼児の育みたい資質、能力を視点に幼児理解を深め、教師の援助や環境について共有をしてきた。今年度教員の園内研究においては自分で選んだ遊びの時間の「ごっこ遊びの援助について」を考察しながら、環境の工夫や援助の工夫について時間をかけて共有、協議してきたことが、それぞれの教員の成果につながっている。また、教員の記録が学年間で共有され、幅の広い視野で幼児一人一人の見方となったことも大きな成果である。さらに来年度は、日々の保育の中での経験が根拠となる幼児教育要領や幼保小の架け橋プログラムなどとも紐付けながら適切な援助や環境構成を行い遊びや育ちを育める教員としての資質向上を目指したい。小学校と幼児・児童間交流、教員間交流、小学校教育との円滑な接続を中心に、「ねりま架け橋期プログラム」を活用し、推進するために近隣の幼保小との関係を深めた。教育課程に踏み込んで話をし合える関係性を光が丘秋の陽小学校、保育所(第7、第11、第9保育園)と幼保小連携教育を進めていきたいと考えている。

また私立こども園との連携が増え、顔の見える関係ができた園が増えてきたことを活用していきたい。他の幼児施設、公立私立の保育所ともつながりができたことから、様々な講演会や研修会などにも誘い、私立幼稚園・こども園、他の公立私立保育所とも関わりを深め、同じ練馬区内の幼児施設の現場としてのつながりも広め、連携し、情報交換を進め、練馬区の幼児教育の質をあげるべく機会を推進していきたい。さらに、療育機関と連携を行い、特別な配慮を必要とする幼児の幼保小の架け橋部分の円滑なつながりを考えていきたい

②「課題の発見と解決に向けて主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の育成」

チームさくらは教員だけではなく主事や事務等の幼児と少し離れた立場にある職員や預かり保育の教員、介助員と正規の教員と様々な業種の教職員である。様々な人々と協働し共に喜び考える集団となれるよう、同じ方向を目指して幼児に関われるようにしていきたい。働き方改革を意識して、各自の公私共に自己改革、自己発揮ができ気持ちの余裕をもって保育に臨めることも進めたい。

また、チームさくら全体の資質向上を考え、特別支援教育の充実、幼児一人一人の特性に応じた指導の充実ができる人材育成も必要となる。特別な配慮が必要な幼児も他の幼児も幼稚園の生活の中で共に育ち合う共生社会を目指し、一人一人の幼児の特性、多様性を理解し、研修、共通理解を重ね、教職員がチームさくらとしての質の高い保育を実践していけるようにする。学務課就学相談係との連携も今年度は機会を作り、保護者への説明などもお願いした。教員にも本園や区立幼稚園だけではなく、同じ幼児施設の見学や研修、区内小学校の支援学級、通級、都立支援学校、などの施設

への見学や研修にも積極的に参加し、実際の具体的な姿を把握して、連携や接続を図るための方法を模索していき、教育の縦・横の両方の視点からも幼児の発達や幼児理解がつながっていることを知り、指導に活かすことをしていきたい。また、保護者と共に、幼児理解を深めていく。保護者支援のためのコミュニティーの場づくりや連携としての関わり、個別相談も推進していく。外部講師による研修の機会、介助員の資質向上を含め教職員が共有できることを考えていきたい。障害者施策推進課 事業計画係より声のかかったことからここ数年実施している障害者理解のための派遣授業、重症心身障害者(児)を守る会や 練馬聴覚障害者協会 手話対策部の手話講話など諸団体との連携を行った。今後も、幼児も保護者も障害を特別としないで共生社会と考える関係性ができる機会を構築していき、教員の体制づくりもおこなっていく。

③「区立・地域の幼稚園としての子育て支援の推進」

地域の乳幼児を支援できるよう、就園前の親子の育児相談、子育て情報、コミュニティーの場など居場所になるように推進する。地域に根ざした幼稚園・必要とされている幼稚園になるように具体的に未就園児保育、施設・園庭開放、行事などの充実方法を考えていく。未就園児親子が気軽に利用できる方法として、修了生保護者で未就園児がいる親子を中心にサークル形式で運営していく方向で、幼稚園がアドバイザー的に関わりながら、居場所作りを進めていく。また、子育て相談や子育てのヒントが伝わる会なども企画していく。園内だけでなく、地域の乳幼児施設からのオファーも来年度は2カ所あった。保護者サークルと共に出向き、地域の中の幼稚園として子育て支援に力を入れていきたい。

今年度始めた近隣の保育所と連携した小学校長の講話の会や研修会を4園1校で連携して来年度も考えていしながら校園長同士がつながっていき、直接育てたい幼児や児童の姿を具体的に話す機会を作りながら、幼保小の連携を推進していきたい。また、幼児同士、幼児と児童の交流だけでなく保護者にも連携をつなげ幅広い子育ての情報を提供し、家庭、地域との連携を推進していく。保育所の看護師との連携事業も来年度も深めていきたい。また、児童館や区民館などと提携し、出前連携も引き続き考えていきたい。保健所との連携によりホームページに食育についての発信を添付、講演会の実施も継続し、地域の子育て保護者への支援になるよう工夫したい。

私立こども園との連携ではより関係が深くなったことで幼児教育の教員の様々な資料提供や研修にもつながり、特別支援についてだけではないつながりができているのを感じる。来年度もさらに深めていきたい。公立の保育所、私立保育所、療育機関などからの見学の依頼が何件も来て受け入れている。今後も多くの見学があることが予想される。保育者等訪問支援との連携、就学相談、子育ての悩みなど保護者のニーズに寄り添って子育て応援団として関わっていく。

在園の保護者には子育ての楽しさを感じられるような機会を作っていくことを考えていきたい。誕生会の時に行っているバースデートークはその機会になっているのを感じる。さらに一緒に活動する中で感じられるような機会や情報発信していくこと、保護者のコミュニティー作りとしてサークル活動やさくらトーク、こあらトークでコミュニケーションの時間の確保など保護者自身の自己有用感を感じられるように考える。

園内、園外の保護者の子育て相談のニーズも高い、定期的に子育て相談のできる機会づくりなどを視野にいれて様々な需要に応じて対応を工夫していきたい。